



●連載(最終回)

中華文明のアポリア

13

近代西洋文明の潮流に
吞まれることなく、
悠久の中華文明を
二一世紀世界へと
いかに再建するべきか？
人類の解き難い難問
|| アポリアに立ち向かう
中国人の葛藤の声に、
耳を澄ましてみよう。

グローバリゼーション 「全球化」

のなかの

知識人の役割

価値喪失の時代に提起する「人文精神」

橋爪大三郎 対談 王 曉 明

(社会学)

(文学)



改革開放政策の徹底により、共産主義の理想が失墜し、天安門事件の惨事により、民主化の夢が砕かれた中国。国民経済を悲観論が覆い、冷戦後の国家ビジョンが描けず、無力感が広がる日本。対照的な近代の来歴を抱え、異なった戦後のコースを辿ってきたアジアの隣国が、市場経済の大海の中で、

“知の商品化”という共通の苦悩に喘いでいる。今こそ知識人は強靱な思考力を取り戻し、豊かな「人文精神」を詠い上げよと提起する王曉明氏。

機能不全を起した知識人に代わって国の健全な将来をデザインする人びとは、当分現われそうにないと嘆く橋爪大三郎氏。「全球化」の時代の光明を、民族主義と民主主義の可能性に求めつつ、二人はこれからの日本と中国の「国のかたち」について熱っぽく語った――。

歴史的転機に立たされた日本と中国 ――拡がる未来への悲観

王 いま日本では「自由主義歴史観」なるものをめぐって論議があると聞きました。歴史にいろいろ解釈があつてよいという立場ならば、もっともな主張で、賛成できますが、いまの日本の特殊な歴史的時期において、歴史多元主義を唱えるのは、ある具体的な政治的意味を持つのではないですか？

橋爪 ベルリンの壁が崩れ、冷戦が終わった一九八九年以降、日本は戦後という時代から、つぎの時代に入っているのです。それまでの日本は、敗戦後、国際的にずっと管理されてきた。具体的には、アメリカの占領、サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約という体制です。冷戦後、これらがその機能を変えなければならなくなって、日本の対アジア政策、朝鮮半島政策、日米関係の見直しを迫られていった。

ところが日本の人びとは、心の準備がまったく出来ていませんでした。そこで現れた反応のいくつかとして、オウム真理教、そして自由主義史観があると思います。自由主義史観というのは、一九四五年までの歴史が百%悪かったわけではない、という主張です。そうなると思えば戦後が戦前と連続することになり、戦後が仮に終わっても、戦前から連続して存在する日本があるので、ポスト戦後世界にも自分の道があることになり、オウム真理教のほうは、戦後国家の完全な否定です。日本国に代えて、オウム真理教の国家をつくると言っ

ていたのですから。これは、アメリカをはじめ国際社会による日本の管理を否定することを意味します。彼らの特徴は、歴史に対する無知と反米主義です。

こういう動きが出てくるのは、当然ではありますが、危険なことです。こういう動きに代えて、どういうポスト戦後の日本を構想するかが大事なことです。でもそういう前向きな提案は、まだあまり出てはいません。

王 どうも日本の前途に悲観的な日本人が多いようですね。日本社会に対する深い批判的思考の熱意がなくなりつつあるのでしょうか？

橋爪 おっしゃる通りです。ではなぜ、日本の次の時代をつくるよい思想が出てこないのか？ それは、戦後という時代を、日本人が本当には理解しなかったからです。

日本は憲法を自分でつくらなかった。日米安全保障条約も、日本独立の条件で、選択の余地はなかった。戦後の日本の進歩的知識人は、平和憲法はいいが、日米安保には反対だと考えました。けれどもどちらも、アメリカに由来するもので、片方だけ採るといのはおかしいのです。アメリカでなしにソ連や中国に希望をつなぐ知識人も多くいました。それに対して自民党や財界の人びとはアメリカ支持で、日米安保に賛成でした。世論はまっぴらに割れ、混乱していたのですが、あえてそれを統一させる必要もなかった。大事なことは、アメリカが決めてくれたからです。こうして戦後は、みな勝手なことを考えて、現実を見ようとしなかった。思想



ワン・シャオミン

文芸評論。華東師範大学中文系教授。1955年、上海に生まれる。華東師範大学中文系卒業。上海文学賞など多数受賞。主に二十世紀中国文学研究に従事し、近年は魯迅論、二十世紀知識人論、先秦思想家論などを研究し、目下、全三巻の『二十世紀中国文学史』を執筆中。ここ数年にわたり中国論壇を大いに賑わせた「人文精神」の提唱者。上海における人文科学系の中堅リーダー。主な著作に『無声の黄昏：当前の文学与時代精神』、『刺々囊の求索』などがある。本誌96年10月に「人文精神」による苦境からの脱出」を記載。

は、空理空論に終始してきた。一九八九年になって、急に現実的になれと言っても無理です。

王 中国も、ひとつの時代が終わわり、新しい時代が始まった。過去の時代は文化大革命の終結とともに過ぎ去り、新しい時代の始まりにあたって、中国の知識界もやはり精神的な準備が欠けていた。中国では、政治の社会に対する影響は決定的なものがあります。その最たるものが、政治による統治の合法性です。理論的に言えば、共産主義の道路に沿って進んでいくことは、神聖かつ立派なことであり、われわれが指導するから、皆は革命せよ、というもので、ここに指導の合法性が成立していた。けれどもプロレタリア文化大革命が終わると、革命なんてバカげていると社会全体が思うようになる。こうして革命理論は、大部分の中国人に影響を失っていき、支配的イデオロギー（「主導意識形態」）は、革命の神聖化の破産とともに、根拠を喪っていき、そこで政権は、新たに支配的イデオロギーを作って統治の

「プロレタリア文化大革命」理論の解体にとどまらず、その後にあつた中国式の「強国夢」の終焉を意味するのです。

そこで新しく始まった時代とは、中国社会が新しい精神の方向を見失った時代であり、これまでの時代と比べて、はるかに深刻な危機をはらんだ時代なのです。この危機は、一九九二年の鄧小平「南巡講話」以降にはっきりしてきました。市場経済に関して言えば、変化は一九八七年にすでにはっきり現れていました。けれども、新しい「支配イデオロギー」の影響のもとでは、こうした新しい時代の深刻な危機は、フタをされてしまう。皆はかえって、現在はとても楽観的な時代、方向のはっきりした時代だと思ひこんでいる。

「小康」は、かつての「強国夢」に比べると、ずいぶん目標のレベルが下がりました。でも依然としてかつての「強国夢」の一部分です。八〇年代を通じて、中国の知識人は、総じてこの支配イデオロギーのうしろを歩いてきたわけで、中国共産党のいわゆる「改革派」の擁護者の役回りでした。知



はしづめ・だいさぶろう

社会学。東京工業大学大学院社会学研究科教授。1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程（社会学）修了。性／言語／権力をめぐる社会学理論の確立から出発し、ポスト・モダンの現代思想、憲法論議、社会時評など、さまざまな分野の諸問題を考察する現代社会学の旗手的存在。現代中国についても深い関心を示している。主な著作に『言語ゲームと社会理論』『はじめの構造主義』『冒険としての社会科学』『性愛論』『橋爪大三郎コレクション』（全3巻）『橋爪大三郎の社会学講義2』などがある。

合法性を生み出そうと苦心した。それが鄧小平の業績です。かつての革命にかえて、新しいイデオロギー「小康」を編み出した。中国の人民に「小康」の生活を保障しよう、中国共産党は導いていく。八〇年代初めに、こうして、新しい統治の合法性が成立するのです。そこで出てくるのは、「現代化」にまつわる問題です。

「強国夢」の瓦解 改革開放の歴史の意味

王 近代以降、西洋（当時の日本を含む）の脅威を受けていた中国人がもつとも恐れたのは、国土が分割されてしまうことだった。そして中国人は、中国の現代文化を築き上げました。その最も大事な要素は、「強国夢（ストロング・チャイナ幻想）」だと思えます。

「強国夢」は、二つからなります。第一は、西洋のやり方を用いて、世界で最も強大な国家になるのだということ。強大かどうかの基準は、西洋にあります。第二は、強国となつてから以降は、中国の基準を用いて（例えば「仁」を基準として）新たに世界に挑みます。康有為の『大同書』、孫文の「三民主義」、毛沢東の革命思想などは、いずれも「強国夢」の表れなのです。この理想が、清朝末期から文化大革命にいたるまで、中国社会の最大の精神的基礎だったのです。

この精神的基礎は、文化大革命が終わったところから、完全に壊れてしまいました。文化大革命の終焉は、単に毛沢東の識人全体が、支配イデオロギーの分析を欠いてきたツケなのです。新しい時代に対する深い認識がないまま、支配イデオロギー「現代化と錯覚したのです。

これが、六・四事件（一九八九年六月四日の天安門事件）に至って、いっぺんに露呈しました。もしも本当に、新しい時代が現代化の道を進んでいたのなら、六・四のような事件が起こるわけがない。そこで中国の知識人は、六・四事件以後、たちまち「失語症」に陥りました。

八〇年代末に、中国のテレビ番組に「河殤」というのがありました。この番組のテーマは、「黄色文明（伝統中国文明）から藍色文明（新たな海洋文明）へ」という、とても楽観的なもので、方向がはっきりしていました。けれども八〇年代末／九〇年代になって、中国は社会発展の方向を見失った時代にさしかかったということがわかったのです。こういうことに心の準備がなかったという点では、日本と似ていると言えるかもしれません。

橋爪 現代中国をつくったのは、二人の天才的な政治指導者、毛沢東と鄧小平です。天才的なのは、毛沢東が農民を革命の主役にすえたこと、鄧小平が市場経済と共産党の政権を両立させたことです。「小康」は、市場経済と共産党政権とが本当にいつまでも両立するのかという矛盾を抱えています。

戦後の日本も、文化大革命のあとの中国の八〇年代と似た経験をしたと思います。経済に集中して、高度成長をとげたわけですが、市場は市場だけで発展することができないので

す。その背後には、政治と軍事がなければならぬ。日本の場合、それはアメリカが保障したのです。アメリカが核兵器を持ち、日本に基地を置き、日本の国家の枠組みを決めていた。だから、経済に集中できたのです。中国の場合、ソ連がその役目をしてくれることはありませんでした。そこで中国は核兵器をもち、中国人民解放軍と共産党が、この経済を保障しなければならなかった。

また日本は、戦後アメリカから民主主義を受け入れて、自立することが曲がりなりにもできました。これは、日本の農民が戦後、ほとんどいなくなったことと関係があります。中国の場合、農民の人口が七〇%以上ですから、ただちに民主化をすることはむずかしい。ですから、鄧小平は大変賢明な方法をとっていたと言えるのですが、中国の知識人が都市で世界の水準に合わせて考えていることと、中国の農民が彼らの現実に合わせて考えていることとのギャップは、大変に大きいのではないのでしょうか。

王 中国には現在、シンガポール式が理想だとする意見があります。政治的には強力な統制、経済的には高度成長を目指す。中国は広大で地域格差が大きく、多くの農民、都市のかなりの人びとも含め、民主主義の素地が欠けている。そこで一定の期間、専制が必要とされる、というわけです。これを中国では、「新権威主義」と呼び、八〇年代中期からその傾向があらわになってきました。当面どうすれば「小康」が得られるかだけを考える、視野の狭い発想です。

受け入れられたからです。他方、中国は鎖国をしていましたが、大きな帝国でした。帝国だったので、そのなかに沢山の民族があり、かならずしもひとつの中国という国だとは意識していませんでした。ですから中華人民共和国が成立するまでに時間がかかったし、中国という国家を確立しようという努力は、いまでも続いていると思います。

昔は中国は帝国で、そこでの知識人の役割は、帝国としての支配を健全化することだった。今は、中国というひとつの国民国家、ナショナルリズムに健全な方向を与えるという役割が求められているのではないのでしょうか？

王 伝統的に中国は、中国という中心と周辺の地域とが不平等な関係でしたから、一種の鎖国でした。近代化とは、この閉じた中国というシステムが、「グローバル化」の過程に入りこんでしまったことです。地球には、中国のほかにも様々な、中国よりもっと強い、文化もずっと優秀な国家があるという現実には直面せざるをえなくなりました。近代を境に、グローバル化する前とその後ではまったく違った時代であって、中国の知識人が果たす役割も、「士大夫」(中国の伝統的な官僚知識層の総称)としての知識人と近代中国の知識人とはまったく別のものであって、二種類の人間と言ってよいでしょう。

その際、新しい知識人階層の形成と、彼らの「私は誰か？」という自己認識とが、同時に始まったわけですが、その過程で、中国伝統の士大夫の思想が、非常に大きな役割を果たしたわけです。五・四運動(第一次大戦後の一九一九

政治的な面の改革はゆっくりで、経済成長は早い。ため、健康的な経済秩序を確立するのがとてもむずかしい。たとえば国有企業の経営不良と失業問題です。経済の競争が激しいと、良貨は駆逐され、かえって悪貨がはびこる。現在の中国では、「優勝劣敗」とならず、「優不勝、劣不敗」「優敗劣勝」となることもしばしばです。それに農村問題、治安の悪化、教育問題を含む文化の問題も深刻です。

改革開放の方向はいいとして、それをどう進むかです。それにはまずはっきり国情を認識することが必要です。近代以降の積み重なった歴史をはっきり認識して今後を考えるのになければなりません。

けれども、支配イデオロギーの確立とともにこうした歴史や現実への認識が欠落したまま、目標もないうまま歩き出しました。中国の思想界・学术界が、九〇年代になってから、こぞって過去百年の中国近代史をふり返っているのはそのためです。

現代社会と知識人

——「士大夫」意識からの脱却

橋爪 日本の場合、近代化とは明治以来、日本という国民国家をつくることでした。これは、わりあい簡単だった。なぜかという点、その前、三百年にわたって、日本は鎖国をしていながら、そのことでかえって外国を意識し、日本を意識していました。そこで開国のと、すぐに国家という概念を

年)のころには、中国の現代文化が形成され始めて、その基本観念において、知識人は社会精神の指導者の役割を担った。国民党にせよ、中国共産党にせよ、設立当時は知識人が大部分でした。知識人は社会思想・文化の指導者であるのみならず、社会全体の政治・発展の指導者であるとも考えられました。さきほどのべた「強国夢」にしても、近代中国の知識人が生み出したものなのです。

溶解する知識人の役割

——現代化と文化的伝統の断絶

王 九〇年代の初めになって、知識人自身の問題をふり返るようになってはじめて、近代以降の過程で果たした役割を反省しなければならぬことが痛感されたのです。近代から九〇年代初めまでの百年間、中国の知識分子は、政府と密接な関係を保ち、表面的に見れば、その役割はとても大きかった。その結果、中国の知識分子はますます独立思考の能力を失い、中国の社会問題を捉える感覚が鈍くなってきている。

いっぽう、日本も含め、現代化の程度が高い社会については、知識人という独立の階層がはたしてあるのかどうか、はつきりとしません。アメリカでも、いかにも知識人のようにみえる人から、ここにはもう独立の知識人の階層などないよと言われました。去年、台湾に行ったときも、知識人の役割に関しては、台湾の多くの人びとはとても悲観的でした。

でも、社会が現代化して合理化すればするほど、ますます

批判的な思想が必要になる。こうした機能は、かつて日本でも六〇年代くらいまでは知識人によって果たされていたのではないですか？ 九〇年代の日本で、こうした機能は一体誰が果たすのですか？

橋爪 戦後日本の知識人には、大きくわけて、三種類の人がいると思います。

第一に官僚。普通は知識人の範疇に入れませんが、実質的に日本の国家の意思決定をしているのは、この人びとです。

彼らには、権力があります。しかし、自分個人の自由な活動も、自分の意見を自由に発表することも、実のところ認められていません。そして実は、専門知識もそんなにないのです。

第二に、大学や企業の研究所で研究をしている、自然科学の研究者たち。彼らは専門化しているので、全体のことがわかりません。

第三に、いわゆる「知識人」と言われている、主に人文・社会科学系の人びと。彼らは新聞や『世界』などの雑誌に原稿を書いたりして世論をつくり出します。だから世間に名前を知られていますが、影響力はあまりない。

八〇年代に、この第三の知識人のなかに、変化が起こった。それはいわば「知識の商品化」でした。マルクス主義はもう古いということになり、雑誌に載って売れる知識こそ正しいとされた。彼らは、ポスト・モダン派と呼ばれました。

でもその風潮も、一九九一年に湾岸戦争が起こって終息した。そのとき自衛隊を中東に派遣するかどうか議論になっ

て、知識人の間で、憲法があるから自衛隊を送ることはでき

ない、いや、日米安保条約があるから送らなければならぬ

という議論が起こり、決着しませんでした。そのときポス

ト・モダンの多くの人びとは、急に憲法が大事だと言いつ

し、戦争の放棄と軍隊を持たないと書いてある以上、派兵に

は反対と主張しました。これでは彼らがさんざん時代遅れだ

と言っていた社会党や日本共産党と同じです。そこでみんな

は失望して、こんな人びとに国の将来を任せられないと思

ました。じゃあ、誰が彼らに代わって新しい議論をつくるの

かというところ、混乱しているのが現状ですね。

たしかに日本において、近代化の過程で知識人の役割は大

きかったです。けれども、まず日本では、伝統的な知識人の

あり方が違いました。日本の伝統的知識人とは武士です。

武士は戦争が強ければよく、あまり本を読まなくてもよかつ

た。それでも儒教の正統論に影響されて、江戸幕府を倒した

のですが、明治維新が成功したあと、彼らは中国の本を読ま

なくなつて、英語やフランス語やドイツ語で書かれたヨーロ

ッパの本を読むようになった。それどころか、武士という階

級そのものがなくなつて、知識人は大学、即ち国家が養成す

ることになったのです。ですから、日本の明治時代の知識人

は、それ以前の伝統をほとんど受け継いでいません。

「人文精神」討論を提唱して

——功利性に対抗し人間の尊厳への目覚めを

橋爪 そこで、王さんが提唱された「人文精神」ですけれども、中国では近代、いやそれ以前から、知識人の役割を認めていました。いま、その役割をもう一回果たそう、というのが人文精神だと受けとめました。ただし、日本で「人文精神」と言えば、一五世紀のイタリアをはじめとするルネッサンスの人文主義をまず思い浮かべます。

王 イタリアの文芸復興は、宗教との関連で言えば、キリスト教が人間の欲望を否定したのに対して、人間の欲望の合理性を肯定し、世俗の価値を強調するものです。

けれども、われわれが人文精神の概念を討論したときの意図は、これと違います。中国では近代以来、中国のあらゆる現代文化は、「強国夢」も含め、政治・経済・社会危機に対応するもので、強烈な現実指向性を帯び、具体的な問題に対応しようという功利性が強かった。

もともと中国の伝統文化は、功利性が強い。そこへ共産主義の理想が加わって、両者が互いに牽制していた。ところが革命の神話が崩壊したあと、みな共産主義を信じなくなり、八〇年代初めこのかた、大部分の人びとは、自分の眼前の物質的利益（サラリーや住居など）にしか関心を持たなくなつた。多大な人口を擁する広大な中国で、人びとをつなぐものはあやふやな利害のバランスでしかないのです。このため、中国社会はとても脆弱になっている。中国のさまざまな現実問題は、いわばこの功利性の行き過ぎに帰着します。われわれが人文精神を討論したひとつのポイントは、こう

した状態を改めなければと思ったからです。いま中国では「誰もが人間さ」という物言いが流行っていますが、この背後には人間は誰しもエゴイステイックな存在で、功利（現実的利益）や世俗的欲望を考えて当然だという見方があります。そこでわれわれは、功利性を念頭におきつつ、価値・アイデンティティ・信仰の問題をさまざまに討論しました。ですから人文精神はヨーロッパの人文主義と違うものです。

中国では、文化大革命が終わるまでとても貧しかった。改革開放が進むにつれ、外国の事情が分ってきた。香港や日本人の生活のよさが目に入ってくると、世俗の欲望に火がついた。このこと自体は正常なことだと思ふし、「あなたはよい生活をするべきだ。貧困はよくないことだ」と言うことも、方向としては正しい。問題は、「人間とはなにか？ それはよい生活をしなければならぬ存在だ」というふうな偏狭な理解しかないことです。人間の社会に対する要求は多岐面にわたるものなのに、「よし、お前に豊かな生活をさせてやる。ただしお前のほかの要求は、押しつぶしてやるぞ。家も収入も自家用車も恵んでやるが、お前の尊厳や自由は与えてやるものか」となってしまう。人間とは、よい生活さえ過ごせればいいのでしょうか？ 新権威主義では、「こんなに人口の多い中国で、人権とは何か？ 人権とはすなわち、生存権のことだ。お腹一杯食べさせているから、もう人権があるのだぞ」という言い方をしますが、その発想は、こうした人間に対するとても狭い理解から発しているのです。

「新市民」の誕生と知識人の新たな任務

民主主義への移行？

王 八〇年代以前、農村は別として、都市の中国人はみんな国家からサラリーをもらっていた。改革開放以降、都市に新しい階層が現れた。この階層は、外国企業の経営者や労働者、个体戸（自営業者）から、売春婦・ボン引きにいたるまで、さまざまな人びとから成っている。これらの人びとに共通な点は、収入が直接国家から得られたものではないということ。私は彼らのことを「新市民階層」とよんでいます。彼らはおしなべて都市生活者なので、市民とよぶわけです。その経済的な存在様式や生活様式は様々ですが、概して功利性第一主義です。同時に彼らには別の面もあって、とりわけホワイトカラー層は、視野が広く、世界性のあるものを見方をし、依存心が弱い。こっちの企業でうまくいかなければ、あっちの企業に移ろうと考え、発想が自由です。

この新市民階層の考え方は、とても新しく内容も豊かです。けれども中国のマスメディアは、こうした新しい市民階層の思想に対して、特定の一面を誇張した描写しかせず、残りの面を切り捨ててしまおう。そして人びとに、新市民階層の社会に対する要求は、物資面しかないという錯覚を与えるのです。こうした報道は、人間はしょせん目前の物質的利益の満足を求める存在でしかないという錯覚させてしまおう。

橋爪 「新市民階層」という場合の「市民」を、王さんは、

公務員ではない民間の人という意味で使っていますが、この用法は中国でごく一般的なもののなのですか？

王 ほかに適当な概念を思いつかないものですか。中国では、かつては「小市民」という用語があり、貶めるニュアンスで使っていた。もともと中国の都市生活者の区分は、工場労働者、幹部、教員、職員といった具合に職業によるもので、「市民」の概念はなかった。ところがごく最近になって新しいタイプの人びとが目立つようになってきたので、職業はさておき、国家機関に属さず国家からサラリーをもらっていない都市生活者のことを「市民」と呼ぶことにしたので。これには貶める意味はなく、ニュートラルな言葉です。

知識人は、いまのところ大部分は、やはり国家のサラリーをもらっているから「市民」には含まれません。フリーランスのもの書きや、インデペンデント系の映画監督とか、テレビ映像作家とかは、「市民」に含まれるでしょう。ただしまだごく少数です。

橋爪 人文精神には、改革開放以後に現れた新しい人びとを、マスメディアが歪めて伝えているのを、もっと正しく見て、人間というのはこんなに豊かな、ありのままの姿を持っているということ、はつきり見つけるといふ意図があったということですね。では、人文精神は知識人だけがそなえればよく、人文精神をめぐる討論は知識人だけが参加する、知識人だけの運動なのでしょうか？

王 まずは知識人に対するものです。知識人が強靱な思考

力をなくしたひとつの大きな原因は、功利性を追求するあまり、つねに現実政治問題を解決しようと発想してきたからです。この結果、知識人は、社会に対する広範で遠くを見通した思考力と独立性を失い、背骨がとても軟弱な存在になってしまった。そこで私は、知識人に一般の功利的なことからより、もっと遠くまで見通せるような精神力をもってほしかった。もちろん、人間に対してもっと全面的な理解が、社会全体の人びとにもだんだんに広がっていくことを望みます。人間に対する理解が定まれば、社会発展の道の目標を選択できることになりす。

橋爪 この人文精神が、知識人から始まって、新しい市民階層や人びとのあいだに広まっていくならば、経済だけではなく、文化や政治や国際関係など様々な問題について、中国の人びとが、どのように考え、どのように決定したらいいかという方針が明らかになるだろうと考えるわけですね。それは民主主義への可能性を示唆しています。

王 この点、中国と日本は異なります。日本は戦後、民主主義を受け入れた国家です。中国人にはこの伝統が足りません。中国の歴史・文化伝統のなかに、この方面の資源がとて少ない。たとえば、孫文は三民主義を唱え自由を唱えましたが、われわれにとっての自由は国家の自由であり、全世界のなかでの中国の自由だ、と言ったのです。この自由のために個人は限定されなければならぬ。これが三民主義だというわけです。

そこでの功利とは国家全体の利益ですから、個人の自由や民主といったものは、とても弱い。こういった状況では、現代の中国人は、民主を二次的な位置に貶めるでしょう。こういう状況で民主意識をどう確立すればよいか？

文化の範疇でいえば、思想の多元化、即ち様々な思想を自由に交流させ、討論し、論争することが大事です。しかしこれまで中国の知識人には異論に耳を傾ける習慣が欠けていました。異質な人間と対等な討論をすることが不得手で、まず相手の話を聞いてから討論するという雰囲気乏しい。これは民主主義の意識の欠落と関係があります。民主主義は単に政治の問題ではなく、まずは思想の問題なのです。

中国の民族主義のいま

——「ノー」と言える中国「現象をどうとらえるか？」

橋爪 グローバリゼーションが進むこの時代に、どのようにして世界と調和しつつ自分の国の進路をみつめていくか？これがいまの最大の世界的テーマだと思えます。そこで大きなウェイトを占めるのは、民族主義の問題です。

日本にとって民族主義は、ほかの民族を排除し戦争につながったため、快からぬ記憶がまとわりついています。中国の場合は、多くの民族問題をかかえ、中国の民族主義の行き過ぎを懸念する周辺国もあります。民族主義にどのようなかたちを与えるかが課題です。

王 中国にはもともと、民族主義のようなものはありませ

んでした。そのかわり、古代から「夷狄之弁（夷狄と中華の区別）」という言葉があった。この区別は人種の生理的特徴でなく、文化に基づくものでした。ですから、中国にはたくさん少数民族がありますが、中国の文化を受け入れれば、外国人でも中国人ということになったのです。清朝の支配民族だった満洲族はその典型的な例でしょう。彼らは漢族ではないけれど、自分を中国人と思っている。

中国の以前の民族主義は、中国と外国の文化のレベルが同じでないという見方を優劣意識に置き換えたという点は、現代の民族主義と同様のよくないところですが、人を皮膚や頭髪の色などといった人種ではなくて文化や精神的価値によってみるころはよい点です。

近代以後に形成された中国の民族主義は、国がばらばらにされるという恐れの中、古い民族主義を改編して形成されたものです。この民族主義には二つ特徴があって、ひとつは外国との対抗性。民族主義とは、外国の侵略に抵抗するものとされた。もうひとつは政治性。民族主義は、「強國夢」とつながって、「図強（強國をめざす）」を主な目標としています。中国が弱いのは、中国の政治統治がだめだからだと考え、民族主義を革命の推進力とします。毛沢東は一九四九年一月一日、中華人民共和国成立式典において、最初に「中国人民はいま立ち上がったぞ」と言った。これは、もはや外国に馬鹿にされないぞ、ということなのです。こうして、民族主義が革命のひとつの理由とされる。

九〇年代になってから、人びとの心理と民族主義との距離は、かなり遠くなりました。昨今の中国人、とりわけ都市の大部分の人びとは、外国を羨んでいる。外国のほうが中国よりもいいと思ってきている。

いっぽう知識人は、民族主義を現代中国社会の最重要課題とは思っていません。中国に問題が多いのは、中国社会そのものの問題に由来するもので、民族主義だけで解釈などできないことに、はっきりと気づいたからです。こういうわけで、いまの中国にとって、民族主義の実質的な影響力は大きくはありません。

国外では、『中国可以説不（ノーと言える中国）』という本の国内での反響を過大評価する向きがあるようですが、中国の知識界はこの本になんら反応を示しませんでした。取るに足らないと考えたからなのです。

橋爪 アメリカをはじめ、中国のナショナリズムをいろいろ心配する国々で、『中国可以説不』という本が話題になったのですが、これは心配のしすぎというわけですか？

王 はい、その通りです。

他者へのまなざし

——台湾問題と少数民族問題

橋爪 中国は、改革開放で外国から技術と資本を入れて経済を発展させると決めた。日本も明治維新のあと、外国から技術と資本を導入しましたが、同時に強烈なナショナリズム

も育ちました。ただ、いまは、九〇年代です。資本と技術のほかに、情報も入れねばなりません。ですから、閉じたナショナリズムは、昔にくらべると育ちにくい。これは、安心できる面です。

そのいっぽうで心配な面もあります。それは、中国のいわゆる「五独（台湾、チベット、ウイグル、カザフ、モンゴルの独立）」問題への懸念です。この問題が今後深刻になると、中国としては、団結と政治的な統一を維持するために、中国への愛国心に訴えて、政治を安定させようとするでしょう。これには、当然、副作用があります。

王 この問題は、とても複雑です。中国国内の感覚から言えば、台湾問題ははっきりしている。台湾問題は、ほんらい民族問題ではなく、政治問題、即ち国民党と共産党の問題です。どちらの党も、「中国」の概念に立っていますから。けれども、台湾独立を唱える台湾人の勢力が出てくると、この民族主義は激しいものになるでしょう。ただしこの民族主義

の最初の矛先は、中国大陸ではなく台湾の国民党に向かいます。台湾の国民党は、ながらく台湾の本省人を抑圧してきました。最近、侯孝賢監督の『悲情城市』という台湾映画を観ました。そこに描かれている民族主義はそれなりの合理性をもっている。それは外省人に抑圧されてきたいまの台湾のマイナスの側面から出てきたものです。ただし外省人排除の発想につながる偏狭な民族主義とも言えましょう。けれども、私はこの問題には楽観的です。台湾の民族主義には歴史的原因があるにせよ、ある時期になると、奇形的なマイナスの面は次第になくなっていく。台湾と大陸との経済的な結びつきがますます強くなっていく。民族主義を強調するあまり、大陸との関係が切れるとなると、台湾の大部分の人びとの経済的利益に、直接影響する。

グローバリゼーションの過程で、歴史がこれまで封印してきたさまざまな問題が噴出してきていますが、これはグローバリズムのプロセスのなかで取り残された歴史の残りカスな

石川 眞 澄

B 6 判・上製カバー・二四〇頁
本体 1600 円

人物戦後政治

私の出会った政治家たち

「政治記者は誰でも初めは時の首相の動静を日がな一日追いかけることから仕事を覚えさせられる。一九六一年に政治部員になった私の場合は、池田勇人首相だった。」政治記者三五年の著者がかぶりつきで見た政治家たちの表と裏。人間的要素と政治のダイナミズムはどう関わるのか。池田勇人、佐藤栄作から菅直人まで。

岩波書店

のです。人類がますます交流を深めていけば、こうした民族問題は軽減されていくでしょう。

問題があるとすれば、民族主義が政治の特定のスローガンとなるか、ある政治勢力に利用されるという側面です。

チベット、新疆の問題もやはり、歴史の積み残した問題です。でも社会全体に対するこの問題の影響は大きくないでしょう。中国社会の全体的発展が良性の発展経路をたどれば、こうした問題は、局部的な問題にすぎません。中国社会そのものに多くの問題があるなら、こうした民族問題は、導火線になるでしょう。

橋爪 そうすると、中国が解決しなければならぬ、民族問題よりもっと重要な問題とは何だと思えますか？

王 まず、中国の近代以来の文化と社会の発展についての反省です。これは中国の現実のよってきたる所を理解する上で重要です。

第二に、社会の発展目標を選択し、設計する際に、人間の理解は偏狭でなく全面的であるべきこと。人間を物質的利益を追求するだけの動物のようにみるいまの見方を打破しなければなりません。

第三に、社会の進歩・発展の基準は何なのかということを見定めること。レーニンが共産主義とは「ソビエト+電化」だと言った。すなわち、無産階級の権力と、経済発展があれば、社会主義になると言ったわけです。スターリンは、この考え方をさらに押し進めた。こうしたことは、中国人の社会

発展に対する見方に影響した。鋼鉄の生産量を、経済指標にした。社会発展の目標を、経済指標に固定した。これが、社会発展の概念を狭くしたと思う。それが人間理解の狭さと一緒になっている。

具体的に言うと、現在、中国社会が抱えた様々な問題、たとえば、公正の問題。自由の問題。生態環境、即ち人間と自然の関係。こうした問題は、社会の発展にとって最も重要な問題でありながら、いまの中国人の多くはこうした問題にほとんど関心を持たないのです。これは、彼らが社会発展の範囲をとっても狭く設定していたことによるものです。

第四に、知識人自身の問題。自分で自分をどう考えるか。

こういう問題に関心をもち続け、思考する努力をしたか。人文精神の討論は、この最後の問題に関係しています。

橋爪 今日のお話をうかがっていて、王さんは文学者なので言葉が抽象的ですけども、実は大変現実的な問題を考えておられるということがよくわかりました。社会が急速に発展する場合、あるものが後回しにされるのは仕方がないことかもしれない。欧米諸国でも、多分そうだったのでしょうか。そうした問題を考える能力を、どう高めていくか。日本人にとっても切実な問題だと思います。

王 あなたは私を文学者と言いましたが、今日の話は文学以外の話題ばかりでした。別な機会があれば、社会学者としてのあなたの意見を聞きたいものです。

(中国語通訳・張静華)

おまけ 毎日新聞

1997年(平成9年)6月15日(日曜日)

「社会学講義」に入る前の、文字通り「講義」には「前に」と題した前置きの冒頭で著者は書いて「日本はむすかしい場所にさしかかった」と思っている。これは、この時代を生きていく多くの人の実感だろう。時代は、日本は、おきらかに大きな曲の角を曲がった。それに伴うさまざまな矛盾や問題も吹き出している。が、そういう事態の前で、私たちは手も足も出さずにいる。一つひとつの事態を、きわめて具体的に観察し、その中で生きている社会の中で生かす方法を身につけたい、それができていかねば、この判断と決断が「むすかしい」として経験ではない。政治家や官僚や企業家や、あるいは知識人といった国のリーダたちは、私たちが自身の直接的でぬきさしならぬ問題に近づいてきている。と、この時代の、この日本のやっかいなところである。なぜ、こんなことになったのか。橋爪大一郎の「社会学講義」に、これは第一の「社会学講義」は、きわめて明確で筋が通っている。

「現代の日本人は、精神的に未熟である。そう思えば仕方がない。それは、一ひとりの人格のなかに、個人としての自己と、国民としての自己とが、独立して存在してはいない。かたや、別の言い方をすれば、両者を関係づけるはずの歴史を、われわれが見失い、個人と国民を同時に自己のなかに抱えておくことができないう。だからである。歴史を生きていくことは、文化を生きていくことだ。人間は、文化を生きていくことなのだ。いかにすれば、もう一つの命題に、著者は、ますます向かい合ってきたと立ち返る、その地

島森 路子 評

橋爪大一郎の社会学講義 2

橋爪大一郎著 (夏目書房・2000円)

新刊本・いろ・いろ・紹介